

# I. 公開講演会

## 「高大を接続する－高校と大学の教師の役割－」

日時：2018年2月3日（土）13時～17時

会場：名古屋大学東山キャンパス ESホール（ES総合館1F）



### 1. 高校と大学とが対話的・協調的に実施する北米の大学入学者選抜－

#### アドミッションオフィサーとカレッジカウンセラーの職務の調査を通して－

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授、附属高大接続研究センター長

大谷 尚

私の話は、「高校と大学とが対話的・協調的に実施する北米の大学入学者選抜－アドミッションオフィサーとカレッジカウンセラーの職務の調査を通して－」です。今回のテーマには、「高校と大学の『教師』の役割」という副題が付いています。このアドミッションオフィサーとカレッジカウンセラーというのは、大学側と高校側で高校生の大学進学を手助けする人たちですが、これは教員ではありません。ですから、ちょっと副題とずれてしまっているのですが、私の講演については、「高校と大学の『教職員』の役割」と考えて頂きたいと思います。これは（両方とも）専門職員ですね。



高大接続研究センター公開講演会  
高大を接続する  
－高校と大学の教師の役割－

**高校と大学とが対話的・協調的に実施する  
北米の大学入学者選抜**

－アドミッションオフィサーとカレッジカウンセラー  
の職務の調査を通して－

2018.2.3(土)  
名古屋大学大学院教育発達科学研究科 教授  
附属高大接続研究センター  
センター長 大谷 尚

### 今回のお話

- ・ 米国のアドミッション部門の仕事
- ・ 米国のアドミッションズオフィサー
  - － 背景
  - － 職務
  - － 専門的発達
  - － キャリア等
- ・ 米国の入学者選抜制度
- ・ その背景となる米国学部教育
- ・ NACAC(National Association for College Admission Counseling)
- ・ 高校側カレッジカウンセラー
- ・ インデペンデント・カウンセラー
- ・ 日本の課題

このような内容です。アドミッション部門の仕事、アドミッションオフィサーの背景、職務、専門的発達、キャリア、米国の入学者選抜制度、背景となるアメリカの学部教育、それから、NACACという、アドミッションオフィサーとカレッジカウンセラーの7,000人が集まるコンファレンスに出て情報収集してきましたので、そのご紹介もしたいと思います。それから高校側のカレッジカウンセラー、それとインデペンデントカウンセラーという人たちがいますので、そのことについて。そして最後に、日本の課題について、私の思うところを述べさせていただきます。以下の内容は、これらを含んでいるが、必ずしもこの通りに区分されてこの順

序で話された訳ではない。

## アドミッションオフィサーとは

これは、アドミッションオフィサー養成プログラムを阪大の高等教育・入試研究開発センターが始めたというニュースです。募集開始とともに受講希望者が殺到、応募定員を上回ってキャンセル待ちになっているということです。ここを担当なさるのが、阪大の川嶋先生、それから名工大の林先生。今日おいでになっていますが、いらっしゃらないなと思っていたら、昨日の夜7時に申し込みがありました（会場から笑い）。それから、大塚雄作先生。入試センターの研究統括官です。こういう重鎮がお務めになって、もう満員であるというのが記事に出ています。そしてアドミッションオフィサーとはこういう仕事をする人ですよということが、ここに出ています。

HOME > 入試 2017年8月17日

### 入学選抜の専門職養成、大阪大学の研修に希望者殺到

大阪大学高等教育・入試研究開発センターは8月23日から3日間、大阪府吹田市の大阪大学吹田キャンパス観音会館で入学選抜の専門職を養成する研修会を開く。大学入試改革で受験生を多面的に総合評価する選抜方法への移行が求められているを受け、企画されたが、全国から受講希望者が殺到している。

大阪大学によると、この研修は「阪大アドミッションオフィサー養成プログラム」。募集人員40人で、入試に携わっている大学の教職員や大学院生らを対象とする。プログラムの参加費は無料。

講師は川崎太津夫大阪大学教授、林篤昭名古屋工業大学教授、大塚雄作大阪大学入試センター統括・研究統括官らが務め、多面的入試制度導入の背景、模擬面接での評価方法、受験生の意欲を推し量る入試の設計などについて講義を受ける。最終日にはグループ演習が予定され、全プログラムを受講すると修了書が交付される。

国が入試改革を進めている時期だけに、募集開始とともに受講希望者が殺到、応募定員を上回ってキャンセル待ちになっている。

日本の大学入試は教員が担当しているが、米国ではアドミッションオフィサーと呼ばれる専門の職員が受験生を多面的に評価して合否を決定することが多い。アドミッションオフィサーは年間を通じて生徒の学業成績や校内外の活動実績に関する情報収集を続けるなど入試業務に専念している。



### アドミッションオフィサーの職務のイメージ


3月の調査で「アドミッションズオフィサーについてはこの映画を通して知識とイメージくらいしかないのです(;)」と言うと「ああ、基本的にあの映画の通りですよ(^)」との答え。

アドミッションオフィサーの職務のイメージですが、この映画をご覧になった方はいらっしゃいますか。

会場に2人いらっしゃいますね。これは日本で劇場公開していないので、ビデオをご覧になるといいのですが、3月にアメリカに4つの大学の調査に行ったときに、「アドミッションオフィサーについてはこの映画を通して知識とイメージぐらいしかないのですよ」と言うのと、向こうのアドミッションオフィサーたちが、「基本的にあの映画のとおりですよ」と言いますので、これを見ることは非常に有益ではないかと思っています。ちょっとラブコメディみたいになっていますが、職務についてはほぼ正しく描かれているということです。（左の女性を指して）この人がアドミッションオフィサーで、（右の男性を指して）これが高校の先生です。

### アドミッションズ・オフィサーとは

- 米国の大学のアドミッション（入学選抜）部門に所属し入学選抜業務（合否判定も）を行う非教員 non-academicの専門職員
- 「アドミッションズ・カウンセラー」などいくつかの呼び方がある。
- 呼び方調べ...



### 日本語でgoogle すると （“・”の有無は結果に影響しない）

- “アドミッションオフィサー”  
- 約 1,630 件
- “アドミッションカウンセラー”  
- 約 478 件
- “アドミッションズオフィサー”  
- 約 148 件
- “アドミッションズカウンセラー”  
- 10 件

アドミッションオフィサーは、今更私が申し上げることもないのですが、米国の大学のアドミッション（入学者選抜）部門に所属し、入学者選抜業務を行う非教員、non-academicの専門職員です。合否判定もこの人たちがします。

「アドミッションズ・カウンセラー」などいくつかの呼び方があります。今からGoogleで呼び方調べをしますが、日本語でGoogleしますと、日本語の場合、「・（中黒）」があってもなくても結果に影響しないことを確認していますので、「アドミッションオフィサー」が1,630、「アドミッションカウンセラー」が478、「アドミッションズオフィサー」がこれ、「アドミッションズカウンセラー」がこれ。つまり、まず「ズ」がないものが2つ来て、「ズ」があるものが2つ来て、オフィサー、カウンセラー、オフィサー、カウンセラーの順ですね。

英語でGoogleすると、「ズ（s）」があるものが2つ来てカウンセラー、オフィサー、「ズ（s）」がないものが2つ来てカウンセラー、オフィサーです。つまり、日本語と英語は全く逆になっているわけですね。日本語は、「ズ」なし「オフィサー」、「ズ」なし「カウンセラー」、「ズ」あり「オフィサー」、「ズ」あり「カウンセラー」。英語は、「ズ」あり「カウンセラー」、「ズ」あり「オフィサー」、「ズ」なし「カウンセラー」、「ズ」なし「オフィサー」。ちょうど逆になっています。このことは、あちらの職員などと話をするときには覚えておくのと通りがいいのではないかなと思いますし、検索するときも重要だと思います。

日本語と英語を比較すると	
日本語	英語
1. ズ無しオフィサー	1. ズ有りカウンセラー
2. ズ無しカウンセラー	2. ズ有りオフィサー
3. ズ有りオフィサー	3. ズ無しカウンセラー
4. ズ有りカウンセラー	4. ズ無しオフィサー

### 英語で google すると

- "admissions counselor"  
-約 1,010,000 件
- "admissions officer"  
-約 847,000 件
- "admission counselor"  
-約 308,000 件
- "admission officer"  
-約 151,000 件

高大接続改革の文書に「アドミッション・オフィサー」という言葉がいつ登場したかですが、最も重要な、高大接続改革をリードしている中教審答申（2014年12月）にはありません。「アドミッション・オフィス」という言葉はあるけれども、（オフィサーは）ないんです。その後すぐに、14年12月に出た15年1月に出た「（高大接続）改革実行プラン」にもありません。初めて登場するのが、「（高大接続）システム改革会議」がここ（2行目と3行目の間を指しながら）で結成され、その秋の中間まとめですね。ここに「アドミッション・オフィサー」という言葉が入ります。最終報告にも当然入ってきて、再び、昨年7月の見直しに係る予告にも入っております。

## 高大接続改革文書での 「アドミッション・オフィサー」の登場は？

- x 中教審答申 2014.12.22
  - アドミッション・オフィスの強化をはじめとする入学選抜実施体制の整備
- x 高大接続改革実行プラン 2015.1.16
  - 各大学におけるアドミッション・オフィスの整備・強化や・・・
- ○ 高大接続システム改革会議「中間まとめ」2015.9.15
  - 各大学において多面的・総合的評価による入学選抜を推進していくためには、入学選抜実施体制の充実・強化は不可欠であり、アドミッション・オフィスの整備・強化やアドミッション・オフィサーなど多面的・総合的評価による入学選抜を支える専門人材の職務の確立・育成・配置が必要である。
- ○ 高大接続システム改革会議最終報告 2016.3.31
  - 以上のような個別大学における入学選抜改革を推進するため、各大学において、アドミッション・オフィスの整備・強化やアドミッション・オフィサーなど、多面的・総合的評価による入学選抜を支える専門人材の職務の確立・育成・配置等に取り組む必要がある。
- ○ 平成33年度大学入学選抜実施要項の見直しに係る予告2017.7.18
  - 個別大学における入学選抜改革を推進するため、各大学において、アドミッション・オフィスの整備・強化やアドミッション・オフィサーなど、多面的・総合的評価による入学選抜を支える専門人材の職務の確立・育成・配置等に取り組む必要がある。そのため、文部科学省として、引き続き効果的な財政支援等を通じ、各大学の入学選抜改革を促進する。

ですから、文科省は、ここで登場させた「アドミッション・オフィサー」という言葉をこれからはもずっと使っていくということになると思います。そうすると、アドミッションオフィサーというのは何をやるもので、日本の大学で機能するのかということが疑問になるわけです。

## 3月の調査について

- 期 間
  - 2017.3.13-17
- 調査対象校 マサチューセッツの4大学
  - マサチューセッツ大学アマースト校 UMass Amherst
    - 州立総合大学として
  - MIT: Massachusetts Institute of Technology
    - 選抜性の最高ランクの大学として
  - Amherst College
    - リベラルアーツカレッジ全米ランキング第2位の大学として
  - Hampshire College
    - SAT, ACT、高校時代のGPAを選抜で全く考慮せず、大学でもGPAを使わない大学として
- 調査内容
  - アドミッション部門の活動と機能
  - アドミッションズオフィサーの
    - academic background
    - 職務と勤務形態
    - 備えるべきスキル
    - Staff Development の機会等

## アドミッション部門の業務と アドミッションズ・オフィサーの職務

- 人数
  - Hampshire 9名, Amherst College 15名, UMassとMIT 20名
- 1人が100以上の高校を担当し、1,000通くらいの出願書類を審査
- ひとりの出願者に対して必ず複数で審査
- 私立大学が学生獲得にかかるコストは、入学者一人当たり約2500ドル
- 入学後の学生の調査→選抜基準にフィードバック

(2017年) 3月に私どもが行ってきました調査は、マサチューセッツの4大学です。4大学は、まず州立総合大学としてマサチューセッツ大学アマースト校。札幌農学校にきたクラーク博士は、もともとここの農学校にいらした先生です。ですから、北大と姉妹校になっています。それから、選抜性の最高ランクの大学として、どなたもご存じのMIT (Massachusetts Institute of Technology) にも行きました。それから、Amherst College。これはリベラルアーツカレッジの全米ランキング第2位です。Williams Collegeが1位、Amherstが2位ですね。ここは(同志社の創立者の) 新島襄が卒業した大学でもあります。それから、Hampshire College。これは、SAT、ACTの点を選抜で全く見ない大学です<sup>1</sup>。そして、大学に入った後も、大学の成績のGPAというものを使っていない大学です。この4つに行ってまいりました。調査内容としては、アドミッション部門の活動と機能、アドミッションオフィサーのあれこれです。

<sup>1</sup> 講演では、高校時代のGPAも見ないと言っているが、正しくはGPAは見ている。高大接続研究センターの公開している講演動画では、この部分に字幕を入れて訂正している。

## 米国大学入学者選抜制度とアドミッション部門そしてアドミッションオフィサーの職務

まず、アドミッション部門の業務とアドミッションオフィサーの職務ですが、人数は、Hampshire Collegeが9名、Amherst Collegeが15名、UMass（マサチューセッツ大学）とMITが20名とのことでした。1人が、平均130という数字もあるのですが、100以上の高校を担当して、1,000通ぐらいの出願書類を読んでいる。1人の出願者に対して必ず複数で審査。後で出てきますが、MITは1人の出願者に対して必ず20人全員が目を通すとっています。

私立大学が学生獲得に掛けるコストは、入学者1人当たり約2,500ドルであると。25万円ぐらいですね。これを聞くと、日本の事務担当者はため息をつくと言われていますが、入学後の学生の調査などもします。例えば、IR（Institutional Research）オフィスから来る情報などを使って、選抜基準の規範（クライテリア）だとかルーブリックの変更を3年や5年ごとぐらいのサイクルでやっていきます。

### 米国の高校生の大学進学準備の年間計画

- 高2
  - 1～2月：進路の検討
  - 2～3月：キャンパス訪問
  - 3～4月：大学選び
  - 4～6月：テスト対策
  - 5～6月：推薦状の準備
  - 6～8月：エッセイの準備
- 高3
  - 8～9月：受験校の決定
  - 9～10月：Early Admission 出願
  - 11～12月：Regular Admission 出願
  - 3～4月：合格通知を受け取る  
合格者のための会合等に参加して進学先を決定する
  - 5月1日：入学手続き

<http://www.us-lighthouse.com/study/education/one-year-plan.html> にもとづく

### 出願の時期と種類 入学試験は無いので 出願=受験

- Early Admission
  - Early Decision (ED) 合格すれば入学義務あり
    - 出願締め切り - 10/15 か 11/1
    - 合格通知 - 12/15 (日本なら 7/15!)
  - Early Action (EA) 合格しても入学義務なし
    - 出願締め切り - 10/15 か 11/1
    - 合格通知 - 12/15 (日本なら 7/15!)
- Regular Admission (RA) 合格しても入学義務なし
  - 出願受付 - 12月-2月に締め切り
  - 合格通知 - 3月-4月 (日本なら 10-11月!)

米国の高校生の大学進学準備の年間計画ですが、これは高2の1月からになります。実は9月始まりでない州もあるわけですが、ほとんど9月始まりで、その高2の1～2月に進路の検討をし、このあたりにキャンパス訪問をし、3～4月に大学選びをして、テスト対策を立て、推薦状の準備をして、エッセイの準備をする。このテストというのが、SAT<sup>2</sup>とACT<sup>3</sup>ですね。

高3の8～9月に受験校を決定する。Early Admissionが9～10月に始まり、Regular Admissionが11～12月、合格通知を受け取るのがここで、合格の手続きは全ての大学が5月1日までにしなくてはならないと決まっています。

この時期と種類ですが、入学試験は無いものですから、出願することが受験ということになるわけです。Early AdmissionとRegular Admissionに分かれていて、Early Admissionは2種類あるのですが、どちらも10月15日か11月1日に締め切り、12月15日に結果が来る。Early Decisionというのは、合格すれば入学義務のある出願の方法で、日本の推薦入学と似ていると思います。束縛のある、拘束のある推薦ですね。（それに対して）これ（Early Action）は拘束はない。これ（Regular Admission）も拘束はない。

<sup>2</sup> Scholastic Assessment Test.ただし現在はSATは略称ではなく、正称とされる。

<sup>3</sup> American College Testing

## 日本よりかなり早期に決まること

- Early Admission が日本の 12/15 に出る
- 日本は早すぎる推薦合格を高校が嫌う。
  - 「受験は団体戦」
    - 基本推薦無し！ 戦線離脱するな！ 敵前逃亡するな！
  - しかし全体主義的な受験体制を敷かず、しかも「受験」がない米国では問題にならない。
- Regular Admission による進学も日本の 12/1 には入学手続き。
  - たしかに米国は学年の間に 2ヶ月の夏休みがあるので同じに考えることはできない。
  - しかし合格しても大学進学のための主体的な勉強を続ける体勢ができていれば日本でも、もっと早期に決定しても問題にならないはず。

ここがちょっと気になるところなのですが、12月15日というのは、9月始まりですから、1月始まりだとすると7月15日です。これもそうですね。3月から4月に合否通知が来て、5月1日に入学手続きを終えなくてはいけないということは、(日本では)12月1日に終えるということです。日本よりかなり早い時期に決まるということが、これでお分かりだと思います。

日本は、早過ぎる推薦合格を高校が嫌いますね。「受験は団体戦」という言葉があって、本心は、「基本、推薦なし。戦線離脱するな！ 敵前逃亡は許さないぞ！」と。そういう、生徒に対する拘束でありますよね。しかし、アメリカは全体主義的な受験体制を敷かないわけですし、しかも出願しなくて受験がないわけですから、早過ぎるから困るというようなことは問題にならない。


Regular Admissionによる進学も日本の12月1日相当ですね。米国は、確かに夏休みが学年の間に入るということもあるわけですから、同じに考えることはできません。しかし、合格しても大学進学のための主体的な勉強を続ける体勢ができていれば、日本でももっと早期に決定しても問題にならないと、私は校長経験<sup>4</sup>をしていて、その経験からもそう考えています。日本では、早く決めることは悪であるという風潮が広がっていますが、私は必ずしもそうではないと考えています。その良い例がこれであろうと思います。

### アドミッションズオフィサーの年間行事

8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6-7月
高校への出願計画作成	高校へ出願 招生の会展に参加		早期出願等の出願書類の審査	通年の出願書類受付・審査			合格発表	合格者向けのイベントやレセプション開催	五月一日・入学手続きの締め切り	職務経歴など？ 長期休暇？

### ROAD WARRIORS: RESULTS OF A NATIONWIDE SURVEY OF ADMISSION COUNSELORS

#### アドミッションズオフィサーについての「路上の戦士たち」という発表



244名のアドミッションズ・オフィサーへのアンケート調査結果

- 66.2% が1日9時から12時間働き、
- 20.9% は1日12時間以上働いている。
- 44.7% が勤務大学から半径500マイル (800km) 以上の場所まで高校訪問に出かけ、
  - 日本に置き換えれば名古屋から盛岡あるいは佐賀までの距離
- 60.4% が昼食後に高校を訪問。
- 53.1% が1日平均4つの高校を訪問し、
- 38.6% がひとつの年度に20以上のカレッジフェア (自大学の宣伝のためのイベント) に参加。
- 37.1% がホテルに26泊から50泊しており、
- 38.8% がヒルトン、36.6% がマリオット、24.6% がその他のホテルを好み、
- 71.3% が運転中の食事のための駐車場所として頻繁にスターバックスを使用。
- 85.1% がネットワーク形成のための専門職的コンファレンスに出席しており、
- 90.2% が高校生とのやりとりこそが自分の仕事で最も報われるものだと感じている。

<sup>4</sup> 講演者の大谷は2010年度から2012年度まで名古屋大学教育学部附属中・高等学校校長



アドミッションオフィサーの年間行事です。今の（出願スケジュール）に対応して、8月、9月に高校に出張します。これがとんでもない数の出張になりますが、後でデータをお示しします。（9月を指して）ここで、後で紹介するNACACとか、いろいろな会合がありますので、そこへ出てプロフェッショナルデベロップメントの機会にする。情報交換をする。そして、（11月を指して）ここでEarly Admissionの書類審査をする。それから、通常書類審査をする。（1月から2月を指して）ここで最終的に審査をして、3月までぐらいに合格発表、合格通知、アドミッションを出します。

合格通知を出された高校生は、いくつも出願をしているわけですから、合格通知が出たところの中からどこに入るかを選ぶわけです。それが4月です。その4月は、Yield month（「収穫月」あるいは「歩留まり月」と言われていて、ここで5月1日までにどれぐらい手続きをしてくれるかということで、アドミッション部門のドキドキヒヤヒヤの1カ月になるということです。

今、ちょっと言いましたが、アドミッションオフィサーが実際にどういうふうに活動しているのかですが、「路上の戦士たち（ROAD WARRIORS）」という発表がNACACのコンファレンスでありました。これはHOBSONSという会社のWEBページに出ていますので、見ることができますが、244名のアドミッションオフィサーにアンケート調査をした結果です。

この中の66.2%が1日9時間から12時間働く。20.9%は1日12時間以上働いている。44.7%が勤務大学から半径500マイル以上の場所まで高校訪問に出掛ける。これは800キロですから、日本に置き換えると、名古屋からだとか北が盛岡、西のほうは佐賀までの距離です。それ以上移動している。

60.4%が昼食時（ランチタイム）を目掛けて高校を訪問している。53.1%が1日平均4つの高校を訪問して、38.6%が1つの年度に20以上のカレッジフェアをやっている。これは自大学の宣伝のためにやるフェアですね。こんないい大学だよとか、卒業生を呼んで紹介をさせたりとか、ぜひうちに出願してねというようなフェアです。

37.1%がホテルに2泊から50泊していて、38.8%がヒルトン、36.6%がマリオット（このあたりで会場から笑い）、24.6%がその他のホテルを好んでいて、71.3%が運転中の食事のための駐車場として頻繁にスターバックスを使用している。85.1%がネットワーク形成のために専門職的コンファレンスに出席しており、私が出させていただいたNACACなんかもそうですが、90.2%が、高校生とのやりとりこそが自分の仕事で最も報われるものだと感じているということです。この雰囲気は、コンファレンスに出ると非常によく分かります。

## アドミッションオフィサーに必要な資質・能力と専門的発達

アドミッションオフィサーに必要な能力や資質についても調べもしましたが、いろいろインタビューで聞きました。まず生徒や高校側カレッジカウンセラーと対話するコミュニケーション能力。それから、出願書類は、アプリケーションの方法によって、エッセイを2本とか、このテーマから、このテーマからみたいなことを、コモンアプリケーションという1つの出願の共通様式があって、そこだと出す書類も一緒になりますので、そのコモンの様式でいくつかの大学に出せることになっていますので、そのエッセイ（レポート、論文）を読んで出願者の特徴を把握する読解力とか推論能力。それから、GPAなどの再計算のための数学的能力、それから情報統合力、

そして教育への情熱が必要だと。

### 必要な能力・資質

- 生徒や高校側カレッジカウンセラーと対話するコミュニケーション能力
- 出願書類（エッセイを含む）を読んで出願者の特徴を把握する読解力、推論能力
- GPAなどの再計算のための数学的能力
- 情報統合力
- 教育への情熱
- 当たり前であるし自分たちについてなので言われなかったが「大学の顔となる好印象を提示できること」が必要
  - インタビュー相手はいずれも明るくユーモアのセンスがあって配慮に満ちており、アメリカ人を代表するような好人物だった。
- なお、自大学出身者は、選抜よりも出願者募集のプロセスで力を発揮する。
  - 選抜性の高い大学＝選抜が重要
  - 選抜性の低い大学（ブランド力の低い大学）＝出願者募集が重要

### 専門的発達 professional developmentの機会

- 多くは、OJT (On the Job Training)
  - 大学ごとによく練られた業務マニュアルがあり、まずそれから学ぶ
  - 2人1組で仕事を開始して教わる大学も
- 協会等への参加
  - NACAC
    - 全米のNational Association for College Admission Counseling
    - 州毎の \*ACAC, NEACAC, etc.
    - 国際的 International ACAC
  - AACRAO
    - American Association of Collegiate Registrars and Admission Officers
  - College Board Forum
  - CIS(the Council of International School )Forum
  - Education USA Forum
- e-learning
- Webinar (WEB上のセミナー、オンラインセミナー)

それと、これは向こうの人は言いませんでしたが、私が感じたことですが、当たり前だし、自分たちについてだから明言はしませんでした。大学の顔となって高校を訪問するわけですから、大学の顔としての好印象を提示できるパーソナリティが必要だと。私たちがインタビューした相手はいずれも明るくて、ユーモアのセンスがあって、配慮に満ちていて、アメリカ人を代表するような好人物ばかりでした<sup>5</sup>。そういう人がアドミッションオフィサーをやっている。

それから、自大学出身者と他大学出身者が混ざっています。どのような場合も混ぜるように採用していて、自大学出身者だけでなく他大学出身者、それから民族や人種などもさまざまな背景を混ぜて、多様性をアドミッションオフィサーの中に設定するようにしています。ですから、自大学出身者と他大学出身者がいるわけですが、自大学出身者は選抜よりも出願者募集のプロセス、つまり宣伝で力を発揮する。

選抜性の高い大学は、選抜が重要になります。というのは、選抜性の高い大学はブランド力が高いので、放っておいても出願者がたくさんいるわけですから、宣伝に行くということはあまり重要ではなくて、いかにいい子を出願者の中から採るかということが重要になる。選抜性の低い大学は、ブランド力が低いので、出願者募集が重要になる。いい子をまず出願させることが重要になるということでした。なるほどと思います。

彼らのprofessional development、専門的な発達の機会ですが、多くはOJT (On the Job Training) だと言っていました。OJTでやっているというのは、実は何も（特別なことは）していないのと同じだと思うのですが、2人1組で仕事を開始して教わるようにしているところや、非常によくできたマニュアルがあるので、まずそれを全部把握して、そのことから仕事が始まるということでした。ただ、自分たちがしていることが何であるかということが最終的に分かるのには、2年ぐらいいかかると言っています。仕事の神髄（について）ですね。

それから、協会等への参加。後で話しますが、私が秋に出てきましたNACAC（ナカック）は

<sup>5</sup> Amherst College 調査の際に、休日にもかかわらず、誰もいないアドミッションオフィスに出てきてくれて、さまざまな情報提供をしてくれ、大学も案内してくれたアドミッションオフィサーは、中国人だった。しかし非常にアメリカ的な好人物だと感じた。



全米のコンファレンスですが、これがあります。これの支部がありまして、例えばニューイングランドだとNEが付いてNEACAC（ニアカック）、イリノイだとIが付いてIACAC（イアカック）とか、そういう「〇〇ACAC」というのが州ごとにたくさんあります。それから、国際のInternational ACACというのもあります。

それから、これは高校側のカウンセラーと大学側とがほぼ同じ数出てくるのですが、大学のほうを中心にしたAACRAOというのがあります。ここはe-learningも提供しています。それから、College Board Forum、CIS、Education USA Forumなどがあって、e-learningや、WebinarというWEB上のセミナーで学習する人もいるということですが、どこで聞いても、あまりこういうことを使っているという答えは得られませんでした。たくさん出ているのですが、これをすごく頻繁に使っているよというようなことはあまりなくて、あれだけ忙しいので、8時間、12時間以上働いているわけですから、無理かもしれませんね。

## キャリア

- 学生時代にインターンシップやボランティアで自大学のアドミッションの手伝い（キャンパスツアーガイド、出願者・出願希望者との面接等）をした人が多い。
  - 若くて熱心な自大学卒業生を採用すれば、彼らを何百もの高校へ送り込み、自分の体験を高校生に語らせることができるので、その大学の出願者募集において多くの利点がある。（MITでのインタビューから）
- ただし旅行がきわめて多いので、家族を持つとこの仕事は続けにくい。
- 休職または退職して高等教育などの修士号を取得し、転職する人も多い。
- 高校側のカレッジカウンセラーになる人もいる。
  - 経験を生かすことができ、かつ旅行しなくて済む。

## アドミッション部門に求められるもの

- アドミッションオフィサーの多様性
  - 考え方、視点、経験、民族（文化）、人種など
- 問題のある学生についての他部署からの否定的報告の検討
- IRからの全体的報告の検討
- 以上に基づく3-5年ごとの質的評価枠組みとループリック（入学選抜者規準）の見直し
- MITの場合
  - MITは合格にする生徒の書類はほぼ全て(20人)が見ている。最初に選考からはずれた応募者は1-2人しか読んでいない、つまり合格に近くなるほど多くが読む。
  - MITはアドミッション部門には、2名のIRの専門家がいる。

どんなふうにもアドミッションオフィサーになり、その後どんなふうにもキャリアを積むのかということも聞きましたが、学生時代にインターンシップやボランティアで自大学のアドミッションの手伝いをした人が多いと。キャンパスツアーというのをどの大学もやっていて、夏休みなんかには高校生が保護者なんかと一緒に来て大学を見るわけですが、そういうツアーのガイドをボランティアでやっていたとか、出願者・出願希望者との面接などもアドミッションオフィサーがやらないで学生がやるということもありますので、そういうことをした人がアドミッションオフィサーになるケースは多いということです。

これはMITでインタビューしたアドミッションオフィサーが言っていたのですが、若くて熱心な自大学卒業生を採用すれば、彼らを何百もの高校へ送り込み、自分の体験を高校生に語らせることができるので、その大学の出願者募集について多くの利点がある。こういうふうなことですね。

ただし、さっき言ったように1年間に26泊から50泊と、旅行が極めて多いので、家族を持つと、この仕事は続けにくいと言っていました。独身の若い人は、やりやすいわけですがけれども。

それで、休職して（大学院に通って）修士号を取ったり、退職して修士号を取ったりする人がいる。（つまり）ほとんどは学部卒でした。大学院を出ていない人たちです。休職して修士号を取る人は戻って来ることが多いのですが、退職して修士号を取る人は、この期間に次のキャリアを考

えて転職していく。転職先は、高等教育関係の大学の別の部門、別の大学ということもありますが、高校側のカレッジカウンセラーになる人もいるとのこと。経験を生かすことができ、かつ旅行しないで済む仕事なので、家族を持つと、その仕事をするという人もいます。後でお話しますが、高校側のカレッジカウンセラーは、大きな高校なら1つの学校に3人ぐらいいるということです。

## アドミッション部門に求められるもの

アドミッション部門に求められるものですが、まず、どこの大学でも強調していたのは多様性です。考え方、視点、経験、民族、人種などの多様性を確保して、多様な学生を採れるようにするのだと。とにかく多様性というのは、アメリカでは民主主義、「バーサティリティ＝デモクラシー」みたいな響きがあって、多様な人たちを採るということが民主的な大学社会、(大学) コミュニティをつくる非常に大きな原理ですし、その多様性がそれぞれの能力をさらに発展させて、良い学習成果を生むと彼らは考えています。

それから、IR部門（機関調査部門）からの全体的報告を検討したり、その前に、問題のある学生について、他部署、さまざまところから否定的な報告が来たりするわけですね。日本ではこんなのではないと思うのですが、大学に入った後で、学習上問題を起こしたとか、行動上問題を起こしたとかいうことがあると、アドミッション部門に全部情報が来て、その子を採用したときにどういう判定をしたのか、その判定の中にどういう観点がなかったのかみたいなことを検討する。これらに基づいて3年から5年ごとに質的評価枠組みとルーブリック、いわゆる「のりじゅん（規準）」と「もとじゅん（基準）」ですね、これを見直すということです。

MITの場合は、合格にする生徒の書類はほぼ全て、さっき言いましたように20人が見ていると言っていました。最初に選考から外れた応募者は1～2人ぐらいしか読んでいないけれども、つまり合格に近くなるほど多くが見ていく。最終的に合格する子というのは、結局最終的には全員が見ているのだということでした。MITのアドミッション部門には、2名のIRの専門家が入っているということです。

### 奨学金とセットで合格を出すことも多い

- 奨学金部門とアドミッション部門がひとつになっている大学も多い
- 奨学金は多様
  - 授与
    - full scholarship 授業料全学免除
    - half scholarship 授業料半額免除
  - 貸与
    - 多様
- 授業料はUMass で1年 200万円、Amherst College で540万円、なかには 580万円(Columbia U) も！
- 全米最低がブリガムヤング大の 55万円（最低で日本の国立と同じ）
- 高校生は、自分の志望とオファーされた奨学金とを勘案して入学先を決める。
- 当然の疑問
  - そんなに授業料を免除したら大学の収入がなくなるのでは？
  - そうか！その分、他の学生の授業料を高くしているのか！だから授業料が高いのか！
  - ちがいます。

### 米国大学基金上位10校

• Harvard University (MA)	\$35,665,743,000	2
• Yale University (CT)	\$25,413,149,000	3
• Stanford University (CA)	\$22,398,130,000	5(tie)
• Princeton University (NJ)	\$21,703,500,500	1
• MIT (MA)	\$13,181,515,000	5(tie)
• University of Pennsylvania	\$10,715,364,000	8
• Texas A&M University-College Station	\$ 9,858,672,136	69(tie)
• University of Michigan-Ann Arbor	\$ 9,600,640,000	28
• Columbia University (NY)	\$ 9,041,027,000	5(tie)
• University of Notre Dame (IN)	\$ 8,748,266,000	18(tie)

Sept. 28, 2017

<https://www.usnews.com/education/best-colleges/the-short-list-college/articles/2017-09-28/10-universities-with-the-biggest-endowment>

- ハーバードは、3.5兆円！州立のテキサスA&Mやミシガン大学でも約1兆円！
- 慶応大学は 481億円、早稲田大学は 274億円、東大は100億円 つまり米國大学と2桁違う。
- 名大は 34億円、つまりハーバードとはちょうど3桁違う。
- ハーバードは基金の運用で年間 15% = 5,250 億円の収益
- 名大(学生数16,500)は基金はハーバード(学生数 22,000)の1年分の基金収益の1/15しかない。

これはご存じだと思うのですが、奨学金とセットで合格を出すことが多いわけです。奨学金部門とアドミッション部門が1つになっている大学もありますし、行くと、左が奨学金部門で右が

アドミッション部門だというようなところもありました。

奨学金は多様で、授与と貸与がありますし、授与にはfull scholarship（全額免除）、half scholarship（半額免除）、それから貸与にはさまざまなものがあります。ご承知と思いますが、この授業料が非常に高いですね。マサチューセッツ大学で1年間に200万円です。ここの計算は1ドル100円でしているので、今は109円ぐらいですので、実際にはもうちょっと高いと思いますが、1年200万円。Amherst Collegeは1年間に540万円。つまり、日本の国立大学の10倍です。最高はColumbia Universityで580万円です。これが最高です。全米最低はブリガムヤング大<sup>6</sup>の55万円。これが日本の国立大と一緒です。本当に高いので、私の知り合いでアメリカ人の女性と結婚している男性も、お子さん2人を陸軍士官学校に入れていますが、そこは無料で、給料も出ますので。

当然の疑問として、そんなに授業料を免除したら大学の収入がなくなるのではないかとということがありますね。今、うなずいてくださっている方がいて嬉しいですけども、「そうか、その分、他の学生の授業料を高くしているのか。だからこんなに授業料が高いのか」と考えられるかという、違うんですね。

「大学基金」というものがあるわけです。endowmentといいます、（右端の数字を指して）これはアメリカの大学ランキングの順位です。この全体は基金のランキングですが、ハーバードが3兆5,000億円持っているんですね。州立のTexas A&MとかMichigan-Ann Arborなんかでも9,000億円ですから1兆円近く持っているわけです。これは去年の9月なのですが、ハーバードは3.5兆円で、これは今言いましたけれども、慶應が481億円、早稲田が274億円、東大が100億円。つまり、米国大学と2桁違うわけです。

名大は、皆さまの努力で34億円集まっています。（会場にいた附属学校教員や附属学校生徒保護者を見て）私たち附属も、みんなで出しましたよね。つまり、34億円というのは、ハーバードとはちょうど3桁違います。この3桁も1円と1,000円の違いではありません。1円と1,000円なら大した違いではありませんが、ここ（34億円と3兆5千億円）の3桁は非常に違います。ハーバードは基金の運用で年間15%の収益を得ているので、年間5,250億円の収益を得ています。ハーバードは学生数が2万2,000で名大は1万6,500ですからあまりサイズは変わらないのですが、名大の基金全体はハーバードの1年分の基金収益の15分の1しかないということです。

実は、これは儲け過ぎだと言われていて、これを担当していた、つまり資金運用していた人たちが、何億円も年収を得ていたそうです。それで社会的批判に会ったので、その人たちは全員辞めて、資金運用の会社を始めたのです。（ですから今は、）ちょっとこれは下がっているかもしれません。

要するに、（奨学金は）ああいうところから出していくわけですね。高い奨学金を出しても、その人たちが卒業してお返しをしてくれたり、あるいは、名声が高くなる大学ほど基金が詰めやすくなったりするわけですから、長い目で見れば、単に慈善でやっているのではなくて、「長期利回りの投資」をしているのだと考えることができるかもしれません。

---

<sup>6</sup> 末日聖徒イエス・キリスト教会（通称 モルモン教）が運営する私立大学。

## 入学率(yield 収穫率・歩留まり)

- 合格通知後の4月1ヶ月間がYield month
- 関心度（ボーダーでは重要）、願書提出前の自発的な接触、キャンパス訪問、メール、資料請求、キャンパスツアー、FaceBookを通じた大学へのアクセスを評価して手続きしそうな学生にアドミッションを出してyieldを上げる。
  - キャンパス訪問をしない生徒の入学率は低い。
- アドミッションオフィサーとの間の信頼と心証形成が影響する

## 2016のyieldの高い大学10校

Universities, Colleges Where Students Are Eager to Enroll から作成  
<https://www.usnews.com/education/best-colleges/articles/2018-01-23/universities-colleges-where-students-are-eager-to-enroll?int=highereducation-rec>

大学(州)	合格者数	入学者数 2016	入学率
Stanford University (CA)	2,118	1,739	82.1%
Brigham Young University—Provo (UT)	6,520	5,246	80.5%
Harvard University (MA)	2,110	1,663	78.8%
Massachusetts Institute of Technology	1,511	1,110	73.5%
Yale University (CT)	1,988	1,371	69.0%
University of Texas—Rio Grande Valley	5,763	3,944	68.4%
Princeton University (NJ)	1,911	1,306	68.3%
University of Pennsylvania	3,674	2,491	67.8%
University of Alaska—Fairbanks	1,144	775	67.7%
University of Chicago	2,499	1,591	63.7%

それから、入学率（歩留まり）ですね。4月の1カ月が緊張の面持ちで、ただ待つだけではありません。その期間に、合格通知を出した学生たちを招待して、大学フェアみたいなものをやるんですね。大学自体に招待する場合がありますが、例えばMITだったら、ペンシルベニア州の高校生で、MITが合格通知を出した生徒たちに、「この日ここに集まってください」みたいなこともやるわけです。そういうときには、当地の卒業生の名士みたいな人が会場を提供してくれる。例えば博物館の理事長をやっているような人が、その博物館を借りて、そこでパーティーをやってくれたりすることもあるそうです。

そのときに、決して豪華な飲み物や食べ物で釣るようなことはないと言っていました。競争にはならないと。それは、私は食べ物が好きなので気になって聞いたのですが、いい食べ物が出るのだったら見学と称して入り込もうと思ったのですが、そういうことは絶対ないと。そういうことをお互いにやらないんですね。NACACのような専門職団体の倫理綱領がありますので、そんなことはやらない。

それで、ちょうど入るか入らないかぐらいのところの生徒では、大学に対する関心度が重要で、願書提出前の自発的な接触とか、キャンパス訪問とか、メール、資料請求、キャンパスツアー、Facebookを通じた大学へのアクセスを評価して、合格通知を出したら入学手続きをしそうな生徒にアドミッションを出して、歩留まり率を上げようとしています。キャンパス訪問をしない生徒の入学率は低いそうです。

アドミッションオフィサーとの間の信頼と心証形成が一番大事だということです。つまり、アドミッションオフィサーが「君は来るね」みたいなことで、「あなたのところだったら行きたいです」みたいなことですよ。

これは、2016年の合格通知を出した人たちの中の何割入ったかの歩留まり率が高い大学10校です。トップがスタンフォードで82%。（参考のために、）陸軍士官学校が88%ぐらいです。そして、ブリガム・ヤングとかハーバードとかがありますが、ちょうど聞いてきたMITがここです。73.5%。計算すると1.36倍ぐらいになるのですが、インタビューのときに、「採りたい学生の1.4倍ぐらい合格通知を出します」と言っていたので、正しい数字を聞いてきたんだと、これでも裏付けられました。もちろんこれはトップ10ですから63%ぐらいで止まっていますが、下のほうは20%以下に下がります。後で例を出します。

## その背景となる米国学部教育

こういったことの背景に、アメリカの大学の学部教育の、日本とは違う様子があるわけです。まず、アメリカの大学は英国風のcollege制度と米国の新しいschool制度が併存していますが、一部のschool系学部（音楽学部、体育学部など）を除いては、新入生はFaculty of Arts & Scienceで、入学時に専門を問わず、文理も決めず、まるっと合格させるわけです。Amherst Collegeのようなりべラルアーツカレッジもそうですね。

入学時に専攻を決める必要がない。専攻は途中で変えられる。複数の専攻を取ることもできる、Double Majorとか。多くはその専攻に進むための背景を問われない。全くピアノを弾いたことがなくても音楽を専攻できる。ただし、入学願書にあらかじめ志望専攻領域を書かせるケースもあるし、2年次までの成績が悪いと志望専攻に行けないというケースもあるそうです。

### 米国の大学

#### —学部教育の日本と異なる背景—

- 米国の大学は、英国風のcollege制度と、米国の新しい school制度が併存。
- 一部のschool系学部（音楽学部、体育学部など）を除いては、新入生をFaculty of Arts and Science（文理学部）で入学時に専門を問わずに入学者選抜をして、まるっと合格させる。
  - 入学時に専攻Majorを決める必要がない。
  - 専攻は途中で変えられる。
  - 複数の専攻を取ることもできる Double Major他
  - 多くはその専攻に進むための背景を問われない
    - まったくピアノを弾いたことがなくても音楽を専攻できる。
    - ただし、入学願書にあらかじめ志望専攻領域を書かせるケースもあるし、2年次までの成績が悪ければ志望専攻に進めないケースもある。

### 米国の大学

#### —学部段階での幅広い教養の尊重—

- 日本だと理系、文系が高校から分かれ大学も学部・学科で受験する。
- 米国のFaculty of Arts & Scienceでは専門は入学後に決めれば良いし主専攻と副専攻で文と理、理と文を取ることもできる。
- 教員にとって、入学時には自分の専攻に入ってくる学生が決まっていない。そのためその学生の合否判定をしたいと思わないし、その責任も無いし、それができない。

それから、ちょっと日本と違うところですが、学部段階での幅広い教養を尊重する。日本だと理系、文系が高校から分かれる場合もある。名大附属は分けていないわけですが、高校から、「理系を受ける」「文系を受ける」と分ける場合もありますし、大学は、学部・学科で受験します。米国は、Faculty of Arts & Scienceの場合には、専攻は入学後に決めれば良いし、主専攻と副専攻で文と理、理と文を取ることもできます。

アメリカの教員にとっては、入学時に自分の専攻に入ってくる学生というのは決まっていないわけですから、その子たちに会いたいとか、その子たちの合否判定をしたいとか思わないし、責任もないし、できないわけです。だから、専門職員が、この仕事ができるわけですね。日本は、うちの学部に来る子、うちの学科に来る子というのがいるわけですから、その子たちの判定を私たちがやりたいと教員は思ってしまうわけですが、それが無いということがまず背景にあります。



## 米国の大学 —進級・卒業評価—

- 9～12月の秋学期、1～5月の春学期、それぞれ16週間2学期の「セメスター制」
- それぞれの学期が独立しているため短期決戦
- 8週間ごとに中間テスト・期末テストがあり、多量のレポートを提出
- 2学期続けてGPAが2.0（平均70点）を切ると、平均Cと退学
- 日本の大学と異なり入学してからの勉強量の多さとディスカッション中心のクラスの厳しさは大変
- したがって入学後に勉学について来られるかどうかで入学者選抜をする
- 学生は宿題や予習 reading assignment 等、復習が大量にあり、勉強に集中するためにも、寮生活を送る
- しかもGPAが重要
  - (Shopping 期間を除き) いったん受講しはじめたら取り消すことができない。その科目を捨てれば0点が付くためGPAが下がってしまいがちとまではできない。日本でも筑波大学はこのやり方。(米国でも例外はある。)
- つまり、総合的な基礎学力と応用力と意欲と学習スキルのある学生を入学させ、やりたい専攻をやらせて、厳しい評価を行って自己責任でどしどし勉強させるのが米国の大学の学部教育

それから、大学の進級・卒業評価。これはどうやって選抜をするかに関わるのですが、9～12月の秋学期と1～5月の春学期が2つに分かれているセメスター制、4学期制です。それぞれ独立しているので、短期決戦です。8週間ごとに中間テスト、期末テストがあって、多量のレポートを提出します。2学期続けてGPAが2.0（平均70点）を切ると、平均Cになって退学になるところも結構あります。日本の大学と異なって、入学してからの勉強量の多さとディスカッション中心のクラスの厳しさが非常に大変だと言われています。

従って、入学後に勉学に付いてこられるかどうかで入学者選抜をする。これに付いてこられるかどうか、合格を出すかどうかの非常に大きな決め手になるわけですね。ここに基準がある。

学生は、宿題や予習や復習が大量にあるので、勉強に集中するためにも寮生活を送るのが普通で、自宅から通っても寮に入るのが普通だと言われています。しかもGPAが重要です。GPAは、名大は「なんちゃってGPA」で、途中で授業を（受講申請を）取り下げることができるので、今回の教授会でも、それはおかしいと私は言ったのですが、（アメリカの大学では）いったん取り始めたら取り消すことができません。「これを捨てよう」みたいに。うちの学生は「切る」と言うのですが、学生の側から「切」ったら0点が付きますので、GPAがどんどん下がっていきますね。絶対それができない。

少し調べたら、筑波大は取り消せないと出ていましたが、米国でも例外はあるようですけれども、基本的には、GPAというのは登録した授業を取り消せないことを前提に学生を頑張らせる制度です。それとともに、取り消すのは授業者側に問題がある場合、あるいは授業に問題がある場合があるので、（安易に取り消せないようにしておけば、学生が大学に、授業の問題を指摘しなくてはならないので、）授業者や授業の問題が浮き彫りにされる場合もあります。

つまり、総合的な基礎学力と応用力と意欲と学習スキルのある学生を入学させて、やりたい専攻をやらせて、厳しい評価を行って、自己責任でどしどし勉強させるのが米国の大学の学部教育で、これに耐えられる、これに勝ち抜いていける学生を採用するのがアドミッションです。

## 米国の大学 -専門は大学院で-

- 米国の大学では、専門は大学院で学ぶと考えられている。
- アメリカの大学は高校レベル？
  - 日本が週5日制になる前の高校までの1年間の授業日数は日本が254日で米国が180日
  - 土曜の半日などを考慮すると授業時間の比は4:3
  - つまり米国では高校卒業までに日本より1/4 x 12年間 = 3年間少なく勉強している。
  - その結果、授業時間で見れば、米国の高校卒業生は日本の中学卒業生と同じ。
  - こう考えれば、米国で高校卒業時に医師や法律家になることを決めるのは早すぎるのは当然
    - ・ 医学、歯学、薬学、法学、経営学、図書館学、社会福祉学、は米国ではすべて学部卒業後の専門職大学院

## 米国の大学

### -人生における学部の意味と機能-

- フランスでは中学で将来を考え、高校で3種のバカロレア（理・経済社会・文）から選ぶ
- それに対して米国人は高校卒業までは「子ども」
- 大学では前述のように寮生活を送るため、家を出て親離れするための所属組織でもある
- 「人生に迷ったら大学に戻る」と言われる。
- つまり大学期とは、キャリアを考え、キャリア形成を行うための学習期間
- だから専門を大学入学前には決めない。

学部では、専門は決まらなくていいのです。専門は大学院で決めます。米国の大学は、専門は大学院で学ぶと考えられています。

アメリカの大学は高校レベルだ、とよく言われます。日本が週5日制になる前の高校までの1年間の授業日数は254日で、米国は180日です。日本は土曜なんかがあるので、計算すると4:3です。ということは4分の1違うので、これを12年間、6・3・3で繰り返すと、(1/4 × 12 = 3 となって) 3年間分、日本の生徒の方が長く勉強していることになります。つまり、授業時間で見ると、米国の高校卒業生は日本の中学卒業生と同じです。

こう考えると、米国で高校卒業時に医師や法律家になることを決めるのは早過ぎるということが分かりますよね。専門なんか決められるはずがない。中3なんですから。と言ったらちよっと失礼ですけども、そういう考え方もできなくはない。その証拠に、医学、歯学、薬学、法学、経営学、図書館学、図書館司書も修士号がないとできません、社会福祉士も修士がないとできません、これらは米国では全て、学部卒業後の専門職大学院で勉強しますですね。

それから、人生における学部の意味もかなり違ってきます。フランスでは中学で将来を考えて、高校で3種のバカロレアから選ぶので、ここで決まってくる。それに対して米国人は、高校卒業までは子どもだと自分たちを認識しているようです。だから、米国の大学生は日本の高校生がするようなどんちゃん騒ぎをするのだなと思います。

大学では、前述のように寮生活を送るので、家を出て親離れするための所属組織でもある。ここで大人になっていく。「社会化」されていくということです。


「人生に迷ったら大学に戻る」と言われています。アメリカでは、大学に何回も何回も行っている人がよくいるのですが、こういうことだったんだなと思いますね。つまり、大学期とはキャリアを考えてキャリア形成を行う学習期間である。だから専門を大学入学前には決めないのだとも考えられます。

## アドミッションオフィサーの主観性は問題にならないか

こういうようなやり方でやっていて、アドミッションオフィサーの主観性は問題にならないかということですが、そうお感じになることがあると思うのですが、アメリカの入学者選抜は、対話的・協調的であるといっても、最終的には買い手市場ですので、この子を採用か採らないかは

大学が決めます。それで、インターネット上にはありとあらゆる流言飛語があって、見ていると楽しいです。

### アドミッションオフィサーの 主観性は問題にならないか？



- アメリカの入学者選抜は最終的には「買手市場」である。
- それゆえインターネット上には、ありとあらゆる流言飛語が
  - 「テキサスを訪問したアドミッションオフィサーが、テキサスチキンウイングスがあまりに辛くて大変な目にあつたため、テキサスの高校からは合格させないようにしたらしい」等
  - 上記の映画も、女性アドミッションオフィサーが、ある高校生を自分が独身時代に妊娠出産して里子に出した子と思い、意図的に合格させようとする。
- これらもアドミッションがアドミッションオフィサーの恣意性に左右されるのではないかという疑念から生じていると推測できる。
- しかし実際には、恣意性ができるだけ機能しないような仕組みが工夫されている。
  - 評価のためのルーブリックがある。
  - 1人の出願者を複数のアドミッションオフィサーがチェックするなど
- 上の映画の女性も結局そのことに失敗して職を失う。

例えば、「テキサスを訪問したアドミッションオフィサーが、テキサスチキンウイングスがあまりに辛くて大変な目に遭ったので、テキサスの高校から合格させないようにした」みたいな話とかですね。流言飛語だと思うのですが、さっきの映画も、女性アドミッションオフィサーが、ある高校生を自分が独身のときに生んで里子に出した子だと思って、その子を無理に入学させようとして書類をいじるんですね。

これらもアドミッションがアドミッションオフィサーの恣意性に左右されるのではないかという疑念、疑義から出ているのだと思いますが、実際にはそういうことができないような仕組みが工夫されています。例えば、評価のためのルーブリックがあるとか、1人の出願者（の書類）を複数のアドミッションオフィサーがチェックするなどです。上の映画の女性も、結局そのことで職を失います。

#### 歩留まり（合格者における入学手続き者の割合）は読み違いしないのか

それから、さっきの歩留まりですが、見込み違いをしないのか、ご心配ではないかと思うのですが、UCアーバインは、2017年の秋に、入学を希望する学生から受けた出願が10万4,000でした。UCアーバインというのは、全米で3番目に多い。入学目標が6,250人で、歩留まりを20%と予想して、3万1,000人にアドミッションを出しました。20%ぐらいですから、さっきの上位から見るとかなり低いです。しかし、7,130人が入ってきた。歩留まり23%です。これだと（当初予定したより）何百人も多いので、寮、授業、教員、教室が足りなくなります。そこで、このことを言わないで（公表しないで）、UCアーバインは500人を後から不合格にしたそうです。そのために社会的批判を受けて、学長が鶴の一声で「全員合格に再びします」と言ったということです。

### 歩留まりは見込み違いしないのか？ UCアーバインの入学取り消し問題

- UCアーバインが、17年の秋に入学を希望する学生から受けた出願は10万4000件
    - これは、UCLAとUCサンディエゴに次いで全米で3番目に多い
  - 入学目標は6,250人で歩留まりを20%と予想し3万1000人に合格通知を送った。
  - しかし7,130人歩留まり23%) が入学手続き！
  - これでは寮、授業、教員、教室などが足りなくなる。
  - そのため 500人を後から不合格に...
  - 後にこれは撤回される。
- [http://www.us-lighthouse.com/study/education/cancel\\_admission\\_ucirvine.html](http://www.us-lighthouse.com/study/education/cancel_admission_ucirvine.html)

### 歩留まりは見込み違いしないのか？ サウスカロライナ大学の対応

- サウスカロライナ大学も、2017秋に入学する学生数が当初予定した5,300人を大幅に上回り6,000人を超えた。
  - 歩留まりを3%程度低く見積もってしまった。
- サウスカロライナ大学の場合はバスケットボール効果だと言われる。
  - 2017年3月の男子バスケットボール決勝トーナメントで、サウスカロライナ大学の男子チームがファイナルフォー(準決勝)に進出し、女子チームは優勝。
- ただしサウスカロライナ大学は入学を取り消さず、学内できちんと対処することを宣言。
  - 近隣のアパートを借り上げてスタッフを配置し学生寮として使う。
  - 1年生が履修する可能性の高いクラスを増やすために、教員採用に奔走した。

[http://www.us-lighthouse.com/study/education/cancel\\_admission\\_ucirvine.html](http://www.us-lighthouse.com/study/education/cancel_admission_ucirvine.html)

サウスカロライナも同じようなことをやってしまったのですが、歩留まりを3%低く見積もってしまった。なぜ高くなったかという、この年に男子バスケットボールチームが決勝トーナメントに出て活躍したとか、女子(チーム)が優勝したとか、こういうことがすごく影響するそうです。ただ、サウスカロライナは入学を取り消さないで、学内で対処することを宣言して、アパートを借り上げてスタッフを配置して学生寮として使うとか、1年生が履修する可能性の高いクラスを増やすために教員採用に奔走したとか、そういう対応もあります。だから、見誤りというのはやっぱり起きているわけですね。

### 歩留まりは見込み違いしないのか？ ウェイトリスト(補欠リスト)

- このような“オーバー Enrollment”を避けるため、多くの大学はウェイトリストを活用。
  - ウェイトリストとは欠員補充のための“補欠学生リスト”
- 大学はあえて少なめに合格通知を送り、その他のポスターラインの学生をウェイトリストに掲載。
- 5月1日以降、定員に達するまでウェイトリストから学生を繰り上げ合格させる。
  - 例えば、ワシントンDCでは、定員を上回る人数を入学させることが禁止されている。
  - ジョージ・ワシントン大学は、毎年1,000人超を繰り上げ合格にしている。
- [http://www.us-lighthouse.com/study/education/cancel\\_admission\\_ucirvine.html](http://www.us-lighthouse.com/study/education/cancel_admission_ucirvine.html)

それを防ぐために、日本のような補欠合格制度にするところもあります。ワシントン州なんかは、定員以上採ってはいけないんですね。「定員管理の厳格化」、日本もやっていますが、それがあるので、とにかく定員ぐらゐまで採っておいてから、5月1日以降に補欠合格者リストから次々合格を出して行って、入学手続きをさせる。こうするとびったり採れるんですね。こういうことをしているところもあります。

## 2017年9月のNACAC (National Association for College Admission Counseling)

### コンファレンスと高校側カレッジカウンセラー

それから、9月に、さっき言いましたNACACコンファレンスに行きました。これが、


National Conference for College Admission Counseling、つまり、大学側のアドミッションカウンセラー（オフィサー）と高校側のカレッジカウンセラーの総合的な会合です。

## 9月の調査について



- 期 間
  - 2017.9.14-16
- 調査対象会合 NACAC National Conference 2017 @ BOSTON
  - National Conference for College Admission Counselingの年次総会
  - 7,000人の参加者（今年は Boston だったのが最大規模）
    - 大学側のアドミッション・オフィサー 約4割
    - 高校側のカレッジ・カウンセラー 約4割
    - 独立 (independent) カウンセラー 約2割（個人または企業）
- 調査内容
  - Conferenceの内容
  - アクセスしにくい高校側のカレッジカウンセラーの情報
  - カレッジカウンセラーとアドミッションカウンセラーの協調

## NACAC conference 全体を貫く雰囲気




- 全体会の際のNACAC会長講演
  - Nancy T. Beane
    - Associate Director of College Counseling, The Westminster Schools (GA)
  - 「大学側のアドミッションズ・カウンセラーと高校側のカレッジ・カウンセラーとは、敵対したり利害対立したりする関係ではなく、生徒のためにより豊かで適切な選択が行われるようにお互いに協働する関係である。」
  - その点で、親和的で協調的、かつお互いを鼓舞するような温かで元気な雰囲気に満ちたconferenceであると感じた。
- 1人のアドミッションオフィサーが100人以上のカレッジカウンセラーを知っているのが会場のあちこちでハグの嵐！

その会場のいろいろなところで司会者が手を挙げさせて、「大学側の人？」「高校側の人？」、必ず「インデペンデントカウンセラー？」と言うのです。恥ずかしながら、実は私はそれまで知らなかったのですが、どこの会場でも2割ぐらいはインデペンデント（カウンセラー）という人がいました。大学が4割、高校が4割、インデペンデントが2割ですね。これは個人か企業です。調査内容はこういうことです。


まず全体を貫く雰囲気ですが、会長の最初のプレナリーセッションでの挨拶にあったのですが、大学側のアドミッションカウンセラーと高校側のカレッジカウンセラーとは敵対したり利害対立したりする関係ではなくて、生徒のためにより豊かで適切な選択が行われるように互いに協働する関係であると。このとおりの雰囲気なんです。お互いに、非常に親和的で、協調的で、お互いを鼓舞するような、温かで元気な雰囲気に満ちたコンファレンスでした。

1人のアドミッションオフィサーが130とか100校以上回っているのが、全米の100校以上のカレッジカウンセラー、1校3人だとすると300人ぐらい知っているわけですから、久しぶりだということで、あちこちでハグの嵐になっていました。

## NACAC conference 一般セッションのトピック



- アドミッションのための面接のあり方
- 出願者の文化的多様性への対応
- アドミッションに活用するテクノロジー
- 出願者のテクノロジーの活用
- ソーシャルメディアの活用
- 合格者への大学進学のためのカレッジフェアの開催方法
- ホームスクーリング
- 将来のアドミッションズ・カウンセラーに求められるもの
- オーストラリアの大学への進学
- アジアの大学への進学
- 英国の大学への進学
- 学習障害を持つ生徒のアドミッション
- 新入生が大学コミュニティに溶け込むためのサポート



## NACAC conference 教育セッションのトピック



- メディアを活用したアドミッション
- トランスジェンダーの生徒とジェンダーの確定しない生徒へのアドミッションの際の手続き等の配慮
- 留学生の獲得
- 低所得の学生への対応
- イスラムの生徒への対応
- アドミッションの100年の改革
- 他校への転学
- 出願のためのエッセイの書き方
- ホリスティック・アドミッション
  - この概念については後述



一般セッションはこんなトピックです。これは（配付資料に）印刷されておりますので、後で




ご覧ください。

それから、教育セッションはこんなトピックです。「ホリスティック・アドミッション」については、後で触れます。

(教育セッションのスライドの2項目あたりを指して) このあたりは非常に面白かったです。トランスジェンダーの生徒とジェンダーの確定しない生徒へのアドミッション。トランスジェンダーの生徒が、親や高校に言っていないけれどもアプライしたいみたいなことがあって、そうすると、例えばミスターとかミズとかという尊称をどうするかという問題も起きるわけですね。そういうものも全部入っていました。自分としても(性自認が)確定していない子がいるわけで、私もあるところから相談を受けたのですが、教育実習に行くのに、自分はどちらの性とも確定していないと言ったら実習校が受け入れてくれなかった。そういうことが日本でも起きているのですが、こういうことがあります。

**NACAC conference**  
**SIG (Special Interest Group)**

NACAC  
National  
Conference  
Boston | 2017



- performing arts
- 視覚芸術
- 退職者
- アフリカ系アメリカ人
- コミュニティカレッジとトランスファー
- 独立カウンセラー
- 国際バカロレア
- 私立高校
- 女子大
- 若いアドミッション部門責任者
- (その家族で)初めての大学入学者世代となる出願者について
- 高校のカレッジ・カウンセラーの資格
- 公立校
- カトリック校
- 他

それから、これはSIG (Special Interest Group)、さまざまな興味関心ごとのグループですね。こういうさまざまなものがあります。

**アドミッションの新しい動向**  
ホリスティック(Holistic) アドミッション

NACAC  
National  
Conference  
Boston | 2017

- 敢えて訳せば「全体論的入学者選抜」
  - 関連する語として、Holistic Review (全体論的評価)
- 分かりやすくいえば、全人的評価
  - holistic medicine は全人的医療と訳す
- SATのような標準化テストによって測定した出願者の学力だけでなく、それ以外のたくさんの面を見て1人の出願者をトータルに評価
- ただし沢山の評価項目の点数を合計するだけでは真にホリスティックとは言えず、さらに積極的にその出願者の全体像を見ようとするもの
- 現在のトレンドであり米国のアドミッションは多かれ少なかれこの傾向がある
  - 選抜性の高い大学ほどそれが強くなっている。
- 多項目の総合点で評価するより
  - 信頼性は低くなるが高い妥当性を狙う(欲しい生徒を取る！)
  - 客観性は低くなり主観性あるいは評価者の主体性が高くなる評価方法
- そのため最終日には「ホリスティックアドミッション、味方か敵か？」というセッションも

**アドミッションの新しい動向**  
ターニング・ザ・ Tide (Turning the Tide)

NACAC  
National  
Conference  
Boston | 2017

- 「潮流を変える。」の意
- Harvard Graduate School of Educationのプロジェクト MAKING CARING COMMON から派生した探索的なプロジェクトが2016年1月20日に発表した報告書の名前
- 大学入学者選抜のプロセスを次の3つの領域で再形成しようと提案する。
  1. 他者、共同体奉仕、公共善へのより有意義な貢献を促進すること
  2. 出願者による他者への倫理的な関与と貢献を、人種、文化、社会階層を背景とする多様な方法で評価すること
  3. 経済的に多様な生徒のための公平な土俵を用意し、過度の達成圧力を減じるような方法で成果・努力 (achievement) の再定義をすること
- 2016年9月からの大学入学者選抜にはすでに影響を与え、2017年の選抜がその2年目
- ただし今回の会では、この名を冠したセッションはなく、このことばがしばしば発表者の発表内容に登場する程度であったため、具体的な影響はまだ少ないと考えられる。しかしこの語への言及頻度が高かったことから、これがじょじょに大きな影響を持っていくことは想像に難くない。
- なお、この概念や報告書を解説するWEBページは、日本語のものはわずか2つしかなく、しかも一方が他方の情報源である。それに対して、中国語のページは無数にあり、中国が米国の大学入学者選抜に非常に高い関心を持っており、日本はまったくそうではないということが象徴的に表れている。

この中でいろいろなアドミッションの新しい動向を見聞きしたのですが、そのうちの1つは(教育セッションのトピックにある)「ホリスティック・アドミッション」です。あえて訳せば「全体論的入学者選抜」です。関連する語としては、Holistic Review (全体論的評価) というのがあ

りますが、分かりやすく言うと、全人的評価です。(医学では) holistic medicineは「全人的医療」と訳しますので、全人的評価と訳せます。

SATのような標準化テストで測定した出願者の学力だけではなくて、それ以外のたくさんの面を見て、1人の出願者をトータルに評価する。ただし、たくさんの評価項目の点数の合計だと、真にホリスティックとは言えません。さらに積極的にその出願者の全体像を見ようとするんですね。だから、足し算とか、加重平均とか、そういう問題ではありません。

(これは)現在のトレンドであって、米国のアドミッションは、多かれ少なかれどの大学でもこの傾向があります。選抜性の高い大学ほど、それが高くなっています。なぜかという、選抜性の高い大学は、どうせ成績のいい子しか来ないので、その成績のいい子の成績をあまり見る必要はないんですね。むしろ、大学に入ってから違ってくる(とすれば、その基盤になる)のは、人物です。だから、人物を見ようとするわけです。

多項目の総合点で評価するよりも、信頼性は低くなるけれども、高い妥当性を狙っているわけですね。(大学側が)主体的に、欲しい生徒を採るんだと。客観性は低くなり、主観性や評価者の主体性は高くなる。よく言えば主体性、悪く言えば恣意性が高くなる評価方法です。そのため、最終日には「ホリスティック・アドミッション、味方か敵か?」というセッションもありました。

さらに新しい動向ですが、「ターニング・ザ・タイドTurning the Tide」、「潮流を変える」という意味ですね。Harvard Graduate School of Educationが「ケアリングを共通のものにしよう」というMAKING CARING COMMONというプロジェクトをやっているのですが、Harvardだけではなくていろんな大学が入っているのですが、そのプロジェクトが出した新しい入学者選抜の動向を提案しています。

これは大学入学者選抜のプロセスを3つの領域で再形成しようとしていて、「1.他者、共同体奉仕、公共善へのより有意義な貢献を促進すること。」「2.出願者による他者への倫理的な関与と貢献を、人種、文化、社会階層を背景とする多様な方法で評価すること。」「3.経済的に多様な生徒のための公平な土俵を用意して、過度の達成圧力を減じるような方法で、成果・学力の再定義をすること。」です。

2016年9月からの大学入学者選抜には既に影響を与えて、2017年の選抜がその2年目でした。ただ、今回の会ではこの名を冠したセッションがありませんでした。さっきのホリスティック・アドミッションのようなセッションはなかったです。だから、具体的な影響はまだ少ないのだらうと思われま。しかし、この語への言及頻度は、どこのセッションでも非常に高かったです。ですから、徐々に大きな影響を持っていくと考えられます。



大変面白いことに、これをインターネットで調べると、この概念や報告書を解説する日本語のページは、わずか2つしかありません。(そして)一方がもう一方の情報源になっているので、1つしか情報源がない。つまり、日本の人はほとんどこれを問題にしていない。ところが、中国語のページは山ほどあるんですね。ということは、中国の人たちはアメリカのこういう新しいアドミッションの方向性に非常に敏感だということだと思います。

## インデペンデント・カウンセラー

それから、「独立カレッジ・カウンセラー (インデペンデント・カウンセラー)」という人たち

がいます。今回の参加者の2割はこれだということをさっき言いましたが、プライベートカウンセラーとも呼ばれます。さっき言ったように、恥ずかしながら全く知りませんでした。大学にも高校にも属さずに、独立して家庭からの依頼で契約をして、大学選択や大学出願をサポートする職業です。

先ほどのROAD WARRIORSという調査をやったHOBSONSも、そういうことをしている企業です。HOBSONSはそれだけをしている企業ではありませんが、一部の業務としてそれを行っています。それから、フリーランスの個人がたくさんいます。

<p><b>独立カレッジ・カウンセラー</b> Independent College Admission Counselor</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>• 今回の参加者の2割はこれ</li> <li>• プライベート・カウンセラーとも呼ばれる。</li> <li>• 大学にも高校にも属さず、独立して、家庭からの依頼で契約をし大学選択や大学出願をサポートする職業。             <ul style="list-style-type: none"> <li>- 前述のHOBSONS 社のような企業</li> <li>- フリーランスの個人</li> </ul> </li> </ul> 	<p><b>個人についてこれらのページを参考に記述すると</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 多くは過去に大学側のアドミッションズ・カウンセラーか高校側のカレッジ・カウンセラーを経験して退職した女性で母親。</li> <li>• セッション毎の契約あるいは出願全体のパッケージ契約</li> <li>• メリット             <ul style="list-style-type: none"> <li>- 高校のカレッジカウンセラーが1年度に何百人もの生徒の面倒をみるのに対して、独立カウンセラーは1年に数人の生徒を見るためきめ細かく対応。</li> <li>- 得意分野があり、音楽、美術などの進学にはより多くの情報提供ができる。</li> <li>- 大学選択と出願に伴う親子の緊張・対立関係の間に緩衝材のように入ってそれを和らげる働きもする。</li> </ul> </li> <li>• しないこと             <ul style="list-style-type: none"> <li>- 「大学とのコネを使って仕事をするものではない」と宣言。</li> <li>- 「出願の際のエッセイを生徒に代わって書いたりしません」と宣言。                 <ul style="list-style-type: none"> <li>• それは非倫理的であるし、大学側のアドミッションズ・カウンセラーはSATの記述式テストの結果をダウンロードして出願時のエッセイと突き合わせるの、そのようなことをすればすぐに大人の手が入ったと分かる。</li> <li>• 中には特別に成果を上げて高収入を得ている人がいることを否定していないが、ほとんどは少ない収入でむしろ生徒のために働き、しかるべき生活をする人たちであると説明</li> </ul> </li> </ul> </li> <li>• 専門職団体を形成しその1つがHECA(The Higher Education Consultants Association)。</li> <li>• 契約の際には、NACACのような会に参加してprofessional developmentをしているかどうかひとつの規準となると説明。</li> </ul>
---	---

では個人のインデペンデント・カウンセラーは何をやっているのかということ、その人たちのページやその人たちの協会のページで見たものがこれです。多くは、過去に大学側のアドミッションカウンセラーか高校側のカレッジカウンセラーを経験して退職した女性で、母親である人です。セッションごとの契約あるいは出願全体のパッケージ契約をします。「この子の今年の出願全体を援助してね」みたいなこととか、「セッションごとに相談に乗ってもらう」ということです。

メリットとしては、高校のカレッジカウンセラーが1年度に何百人もの生徒の面倒を見るのに対して、独立カウンセラーは1年に数人の生徒を見るので、きめ細かく対応できる。家庭教師みたいなものですね。得意分野があって、音楽や美術などの進学には、より多くの情報提供ができる。それから、大学選択と出願に伴う親子の緊張・対立関係の間に緩衝材のように入って、それを和らげる働きもすると言っていました。つまり、親は「もっと難しいところを受けろ」みたいになって、子どもは嫌だとか、子どもは「都会の大学がいい」と言っているけれども、親は「この田舎の大学からは、あなたに奨学金が出ると言っているから、この田舎の大学に行きなさい」みたいなことがあるわけで、親子の間にコンフリクトが起きるわけですが、その間にヒューマン・インタフェースとして入るとのことだと思います。

「こういうことはしません」という宣言もしてありました。「大学とのコネを使って仕事をするものではない」と明言。たとえその人が前に、大学のアドミッション・オフィサーであっても、大学とのコネを使って仕事をするのではありませんよと。その期待はしないでください。とありました。

それから、「出願の際のエッセイを生徒に代わって書いたりしません」と宣言されていました。それは非倫理的だし、大学側のアドミッション・カウンセラーはSATの記述式テストの結果を

ダウンロードして、出願時のエッセイと突き合わせて見るので、そのようなことをすればすぐに、大人の手が入ったと分かります。SATのエッセイはその場で書くしかないわけですから。


中には、特別に成果を上げて高収入を得て、高級車に乗っている人もいるそうで、そのことは否定していませんでした。プロの（カリスマ的？）インデペンデント・カウンセラーですね。しかし、ほとんどは少ない収入で、むしろ生徒のために働き、しかるべき生活をしている人たちであると説明しています。

かれらは専門職団体を形成して、その1つがHECA (Higher Education Consultants Association) というものです。一般の人たちに対して、インデペンデント・カウンセラーと契約する場合には、NACACのような会合に参加してprofessional developmentをしているかどうかを1つの基準として考えてくださいということも言っていました。だからNACACの参加者の2割に達するほども来ているんですね。

## 日本の課題

このNACACのコンファレンスから日本の高大接続改革のために学ぶべきことは、大学側、高校側、独立の、立場の異なるカウンセラーが日常的に対話を重ねているわけですが、さらに7,000人規模の会合で情報交換と経験交流を行って、生徒のためにより優れた仕事をしようとしている姿勢だと思うんですね。

**NACAC Conference から日本の  
高大接続改革のために学ぶべきこと**



- 大学側、高校側、独立の、立場の異なるカウンセラーたちが、日常的に対話を重ねながら、7,000人規模の会合で情報交換と経験交流を行って、生徒のためによりすぐれた仕事をしようとする姿勢
  - 日本の「全国大学入学者選抜研究連絡協議会（入選協）」は3日のうち1日目半日だけ高校・教委を参加させ2日目と3日目はなんと高校をシャットアウト！
  - あたかも生産者たちを閉め出して行うパイヤー達の秘密会合のよう、
  - これで良いはずがない。
- 米国の大学入学者選抜制度は、このような人々のこのような努力によってこそ支えられている。

日本の「全国大学入学者選抜研究連絡協議会（入選協）」に行って、私はショックを受けたのですが、3日のうち1日目は午後夕方方ぐらいから始まるのですが、その日だけ高校と教育委員会が入っているのですが、2日目と3日目はシャットアウトなんですよ。意味が分かりません。高校があそこに入っているでもいいじゃないですか。シャットアウトでやっているのです。これでいいはずがありません。

米国の大学入学者選抜制度は、こういうことに支えられているということですね。相互の信頼です。シャットアウトはつまり、生産者たちを閉め出して行うパイヤーたちの秘密会合みたいなものです。

## 日本と異なる点

学習者集団（学年）全体のデザインをする

- 学年全体の多様性等を考慮した意図的なデザインに基づく選抜
  - 日本の客観性最重視の一点刻みの合否判定では全く不可能



## 日本と異なる点

共通テストを使用するかしないかこそアドミッションポリシー

- 選抜性の高い大学で、共通テストの弊害を認識し、test optional とするケースが増えている。
  - このような大学では、出願者の学力はきわめて高いので、共通テストで学力を評価する必要はない。
  - 高校によるGPAの差はカリキュラムの強さに基づいて大学側で調整できる。
  - だったら弊害を排除しようとする。
- 統一テストを必須とすることの基礎と意義を常に問いかけ、再評価することが重要。  
NACAC(2008)、松井(2009)より。

さて、これらの人たちの仕事ですが、私は学習者集団全体のデザインをするということがまず日本にないと思うんですね。学年全体の多様性等を考慮した意図的なデザインに基づいて選抜をするのです。つまり、あなたの高校からは、課外活動を熱心に行っている子を今年採用するのです。隣の高校からは、部活みたいなことを熱心に行っている子を採用するのです。そうやって多様性を割り付けて、多様性を持った1学年、今年入る子というのは4年後ですから「class of 2021」と呼ばれるのですが、そのclass of 2021というのをデザインして、意図的に採用するんですね。これは、客観性最重視の一点刻みの日本の合否判定では絶対できないわけです。

それから、共通テストを使用するかしないかこそアドミッションポリシーに入っていて、選抜性の高い大学で、共通テストの弊害を認識して、test optional (SATやACTの点数は提出しなくても良い) とするケースが増えています。プリンストンが確かあれですし、MITも共通テストをやらなるとか、高いところではむしろSATなんかを使わないところが多いです。さっき言ったように、学力が極めて高いから、これで測る必要がないということもあるわけですが、高校のGPAの差はカリキュラムのストレングス（強さ）を調べて、それで調整して見るわけですね。

それと、統一テストを必須とすることの基礎と意義を常に問いかけて、再評価することが重要だとNACACも言っていますし、日本の松井先生も指摘しています（松井、2009）。

## 日本と異なる点

アドミッションオフィサーが評価しないもの

- 意図的・技術的に形成されたテスト受験学力
- (2)テストの準備とテスト情報へのアクセスで、高校生の間には格差があることを理解し、考慮に入れよ。
- 研究では、SATの旧1600点スケールで、20-30点は受験のための準備によって得点される傾向が知られている。テストの準備として最終的には、基礎的な知識と能力が重要ではあるが、質問形式、試験の実施方法や、また学生の学習上のスキル、アチーブメント、そしてテストとの慣れ、などの要因が点数にどのように影響するのか、しっかりと調査し、情報を得て共有し、評価する必要がある。
- 日本の高校は3年かけて（中高一貫校では6年かけて）この「テストの準備」つまり受験学力形成を行っている。
- そしてそれを大学も評価している。
- したがって、23-30/1600ではなく、もっと多くの、評価すべきでないものにもとついて入学者選抜を行っている。

## 日本と異なる点

出願者の人物像を隠してしまわない

- 受験番号だけに匿名化した合否判定は出願者の人物的特性をマスク（隠）してしまう。
- いくらか特性の諸項目を点数化してそれを合計しても、人物像は見えなくなる。
  - 質を量に還元するやりかたの限界
- 米国の入学者選抜は、匿名化せず人物像をマスクしない
  - むしろ質全体の評価の中に量的指標を取り込もうとしている

それから、アドミッションオフィサーが評価しないものは、意図的・技術的に形成されたテス



ト受験学力です。これを評価しないように努めています。テストの準備とテスト情報へのアクセスで、高校生の間に格差があることを理解して、考慮に入れよというふうになっています。

日本は、3年（中高一貫だと6年）かけてこれをやっているのだから、大学がこれを評価しているわけですね。それを意図的に、評価しないように、評価しないように、努力をしているということです。向こうは、入れても1,600点中の23～30です。日本は1,600分の1,600ぐらい評価しているのではないかと思います。

それから、出願者の人物像を隠さない。受験番号だけで匿名化した合否判定を日本ではしていますが、そうすると出願者の人的特性がマスクされてしまうわけです。いくら特性の諸項目を点数化してそれを合計しても、人物像というのは見えなくなる。質を量に還元するやり方の限界が出てくる。

米国の入学者選抜は、匿名化せず、人物像をマスクしない。つまり、量的指標は使うけれども、それは質全体の評価の中に取り込むのだということです。

<p style="text-align: center;"><b>日本と異なる点</b> 対話的・協調的なプロセスである</p> <ul style="list-style-type: none"><li>日本では、高校は調査書を書くが、一般入試なら大学はそれを全く見ていないことも多い。<ul style="list-style-type: none"><li>- 高校側<ul style="list-style-type: none"><li>・ せっかく一生懸命書いたのだからちゃんと見て欲しい!</li></ul></li><li>- 大学側<ul style="list-style-type: none"><li>・ そんな仲人口みたくないものを見ても意味がない。</li></ul></li></ul></li><li>これでは騙し合い、裏切り合いの入学者選抜</li><li>そこには対話や信頼があるとはいえない</li><li>米国の入学者選抜は両者が次の点で一致点を見いだすことに努める対話的・協調的なプロセス<ul style="list-style-type: none"><li>- ひとりひとりの生徒に適した進学先を選び入学させたい高校側</li><li>- 自分の大学に適した生徒を入学させたい大学側</li></ul></li></ul>
---

<p style="text-align: center;"><b>日本と異なる点</b> 最後の最後まで高校との対話は続く</p> <p>「コミティ」と呼ばれる合否の最終判定会議でボーダーラインにいる生徒の合否を判定するため、アドミッションカウンセラーがカレッジカウンセラーに追加情報を問い合わせることもある。</p> <p>その際、「第一志望かどうか」「学業成績が落ち込んだ理由」などの質問から、時には「心の病から立ち直っているか」「麻薬常習から本当に更生しているか」といったことまで聞く。一方、カレッジカウンセラーからは「合格できる見込み」「第一志望であれば合格するのか」「合格させるために必要な追加資料は何か」などの問い合わせが来る。</p> <p>こうしたやりとりを頻繁にカレッジカウンセラーとできるようになるためには、個人的な信頼関係が必要で、誰とでもできるわけではなく、少しずつ積み上げていくものでもあるようだ。(後藤(2005))</p>
---

それから、対話的・協調的なプロセスだということです。高校がよく、「せっかく調査書を生懸命書いたのだから、大学でちゃんと見てほしい」と言うわけですが、大学は、「そんな仲人口みたくないものを見ても意味がない」といって、縄でからげて倉庫に放り込んであるという大学もあるわけですが、これでは騙し合い、裏切り合いですよね。対話や信頼はない。

米国の入学者選抜は、両者が次の点で一致点を見いだします。一人一人の生徒に適した進学先を選んで入学させたい高校側と、自分の大学に適した生徒を入学させたい大学側が一致するところで生徒を採るということです。

それから、最後の最後まで高校との対話は続きます。「コミティ」と呼ばれる合否の最終判定会議、これはさっきの映画にも出てきますが、ボーダーラインにいる生徒の合否判定をするために、アドミッションオフィサーがカレッジカウンセラーに追加情報を問い合わせることがあります。

その際、「第一志望か」、「学業成績が落ち込んでいる時期があるけれども理由は何か」とか、「心の病があったと書いてあるけれども立ち直っているか」とか、「麻薬常習から本当に更生しているか」とか、そういうことも聞いて、最後の最後まで情報収集をしていくということですね。

こうしたやりとりを頻繁にカレッジカウンセラーとの間でできるようにするには、個人的な信

関係が必要で、誰とでもできるわけではなくて、少しずつ積み上げていくということも、後藤先生は指摘しています（後藤、2005）。

### 日本と異なる点

さらにもっと低学年から時間をかけて評価

- Coalition Application 2016-
- 9年生（日本の中3）からアカウントを作成して容量制限のないオンラインのストレージ The Locker というハイスクールポートフォリオに学習成果や活動成果を蓄積する。
- Coalition Space に大学のアドミッション担当者等を招待して対話を行い指導を受けられる。
- 大学は時間をかけて生徒を評価できる。
  - 「より長い線」で評価
- さらに、低所得・低学歴の家庭など、環境によって能力を伸ばせないでいる潜在的な優秀生徒に介入することで進学支援を行う。

それから、さらにもっと低学年から時間をかけて評価する。点で評価するのではなくて線で評価しているのですが、もっと長い線の動きがあって、Coalition Applicationというのが2016年から始まっています。9年生、つまり日本の中3からアカウントを作成して、容量制限のないオンラインのストレージ、The Lockerというハイスクールポートフォリオに学習成果や活動成果を高校生が蓄積する。そこに大学側のアドミッションオフィサーを（ネット上で）招待して、「見に来てね」といって見てもらう。そういうことをするんですね。

時間をかけて評価できる。さらに、低所得とか低学歴の家庭で環境によって能力を伸ばせないでいるけれども才能があるなという生徒がいたら、アドミッションオフィサーが介入して、こうするともっと勉強できるとか、ここに情報があるよというようなこととして伸ばしてやるということまでやっている。

### 日本型アドミッション・オフィサーは成立するか

- 「米国の学部教育自体が日本と大きく異なるので、日本の学部教育を変えない限り、米国型のアドミッションとアドミッション・オフィサーは日本では全く機能しない」と良くいわれる。
- しかし本当にそうだろうか？

### これに近い入学者選抜は日本に無いか

- ある。
- 長い間続くと、しかもある程度大きな高校集団から採る指定校群からの推薦制度
  - 例：カトリック系大学へのカトリック校からの指定校推薦入学
- 高校生活全体を見て、成績だけにとらわれず、部活や課外活動などを総合する評価によって高校が推薦し、大学が合否判定する。
- 高校生も受験学力育成にとらわれず、のびのびと高校生活あるいは中高一貫校生活を送ることができる。
- また、比較的早期に決まるので、その後ののびのびと勉強できる。
  - 合格が決まったら遊んでしまうような生徒は推薦しない。
- これはほとんど研究されていないが、これが有効に機能している面は多くあるように思われる。
- 大学側でこれに従事しているのはまさにアドミッションオフィサーではないのか。...
- 要研究！

日本型アドミッションオフィサーは成立するかということですが、日本は大学の学部教育制度が全く違うので、アドミッションオフィサーは日本では機能しないよとよく言われるのですが、本当にそうだろうか。

実は、それに近い入学者選抜があるというふうに私は気が付いて、例えば、長い間続く、ある

程度大きな高校集団から採る指定校推薦です。カトリック系大学へのカトリック校からの指定校推薦入学なんかはこれですね。今日もカトリック校の先生が来ていらっしゃいますが、私はずっと考えて一昨日ぐらいに思い出したのですが、うちの子どももこれでした。これで上智の外国語学部に、英語科に入っているのですが、私の子どももこれでしたね。

高校時代、中高一貫だったら、その時代は伸び伸び勉強できるんですね。部活とかも伸び伸びやる。高校の先生はそれを見ていて、成績だけではなく、それで高く売ってくれる。この子はこういう子ですよ。伸び伸びやっている子というのは、受験学力は高くないかもしれないけれども、問題解決したりコミュニケーション能力を付けたりということはできているので、大学に入ってから伸びます。そういう子を大学のほうも欲しがる。そういうことが起きているんですね。

こういう子は、早く決まっても、その後も伸び伸び勉強していますので、早期に合格が決まったら遊んでしまうような生徒は高校は推薦しませんので、うまくいっているんですよ。ほとんど研究されていないけれども、有効に機能している面が多くあるように思われて、大学側でこれに従事しているのは、まさにアドミッションオフィサーではないのかなと思います。これは研究する必要があるように思います。なかなか大学側の人は詳しく教えてくれないかもしれませんが、それでも。

#### これに近い入学者選抜は日本には無い

- さらにもうひとつある(あった)
  - こちらこそ米国の大学入学者選抜に近い
- 「九州大学21世紀プログラム(21cp)」2001-2017
  - 定員26名(学年定員2,600名のわずか1%)
  - 一般の学力試験を行わないAO入試
  - 専攻を決めない入学(文理さえ決めない)
  - 入学後は必修はなくごくわずかの授業以外は学部を超えて自由に選択
    - この3つは米国のFaculty of Arts & Scienceへの入学と類似
  - 合格すると他大学を受けられない
    - これは米国の大学へのED(Early Decision)入学に相当
- これこそ大学独自のアドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーによる高大接続改革の旗手(トップランナー)であったと評価できる。
- 惜しくも廃止(新学部(共創学部)のAO入試へ)
  - 生まれるのが早すぎたのか...
  - 大学教員の有する無自覚だが強固なアカデミック・バターンリズム(Callahan, 1986)との戦いに負けたのか...

もう1つはこれですね。もう1つある、「あった」なのですが、こちらこそ米国の大学入学者選抜に近いです。

九州大学の「21世紀プログラム」、「2プロ」と呼ばれているものですが、定員26名で、2,600名のわずか1%。一般の学力試験を行わないAO入試で、専攻を決めない入学ですね。文理さえ決めない。入学後は必修はなく、ごくわずかの授業以外は学部を超えて自由に選択。この3つは、アメリカのFaculty of Arts & Scienceへの入学とほぼ同じです。合格すると他大学を受けられませんが、これはEarly Decisionと同じですよ。私は、これこそ大学独自のアドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーによる高大接続改革のトップランナーであったのではないかと思います。

これをやっていらっしゃったお2人の先生のうちのお1人が今日はいらっしゃっていますが、惜しくも廃止です。新学部のAO入試に変わります。生まれるのが早過ぎたのではないかなと思いますが、ただ、これは高校との対話はなく、今日メールでお聞きしたのですが、高校からの推

薦書さえない。自己推薦であるということです。だから、大学側と高校側との対話はない。今の状態で対話しても、仲人口ですから意味がないかもしれません。

これは生まれるのが早過ぎて廃止になったのですが、これをやっていらっしやったもう1人の先生、木村拓也先生のお話を聞いたときに気が付いたのですが、「無自覚だが強固な、大学の他の先生方のアカデミック・パターンリズム」が敵であって、その戦いに負けてしまったのではないかと、私は個人的に思います。

### 日本の入学者選抜についての課題

受験学力ではなく高大接続型学力形成と全人的発達のために

- 共通学力テストの採否もアドミッションポリシーの範囲にすること
  - 大学の主体性の尊重
- 点による選抜から線による選抜への移行
- 学力テストのための準備が高校生に与えるプレッシャーの悪影響の評価とそこからの生徒の解放
- 評価における受験学力形成準備効果の排除の努力
- 妥当性の高い全人的評価方法の開発
- 学習者集団の多様性をもつ力を発揮させるような学習者集団全体のデザインとそれにもとづく入学者選抜の研究と実施
- 大学と高校との相互の信頼の形成
- 大学と高校との間の対話的で協動的で継続的な情報交換
- そのための研究と人材育成
- 入学後のフォローアップ調査とその結果を選抜規準へのフィードバック

日本の入学者選抜についての課題、このことからどういうことを学ぶかですが、「受験学力ではない高大接続型学力形成と全人的な発達のために」。これが、「共通学力テストの採否もアドミッションポリシーの範囲」にするとか、「点による選抜から線による選抜への移行」、「学力テストのための準備が高校生に与えるプレッシャーや悪影響」をきちんと調べる。「評価における受験学力形成準備効果の排除の努力」をするとか、「妥当性の高い全人的評価方法」を開発するとか、「多様性を持つ力を発揮させるような学習者集団全体のデザインと、その入学者選抜」を研究する必要がある。

それから、「信頼関係」をつくるとか、「対話的で協動的で継続的な情報交換」が必要だとか、「そのための研究や人材育成」が必要だとか、「入学後のフォローアップ調査」。今、ほとんど大学ではやっていませんが、どういう方法で入ってきた子が、その後どういうふうに伸びているのか、問題を抱えているのかというような調査をして、「それをフィードバックする必要」があらうと思っています。

文献はこのようなものです。

### 文献

- Callahan(1986) Academic Paternalism. *International Journal of Applied Philosophy*. 3(1). 21-31
- 後藤 彰賢(2005) 【アメリカ大学事例】 生徒の興味の度合いにあわせて大学情報を段階的に提供: Between
- Hiring a College Admissions Counselor—Part 1 Part 2 by Audrey Kahane
- 出光直樹(2015)アメリカの入学者選抜の本質は専門職の合議による多面的視点: Between
- LightHouse (2016)アメリカの大学入試制度と最新動向
- LightHouse (2016)日本とアメリカの入試制度改革
- LightHouse (2017)アメリカの大学入学審査のケーススタディー
- LightHouse (2015)ビッグデータ時代のアドミッション
- 松井 龍輝(2009)アメリカの大学アドミッションとアドミッション・オフィサーの新しい課題: 大学評価・学位研究. 10
- 中田 豊子(2016) 「大学での成功」を予測する?～アメリカの大学アドミッションから学ぶ
- National Association for College Admission Counseling(2008). *Report of the Commission on the Use of Standardized Tests in Undergraduate Admission*. Arlington, VA.
- 佐藤浩章(2011)アメリカの大学におけるアドミッションズ・オフィスの学生マーケティング・リクルートメント戦略: 高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習— 9
  - ネガティブな期待ギャップを抱かせない
- Why should I use a college admission counselor and what value they deliver? Ajay Singh(September 18 2016)
- 八重樫 隆(2015)大学入学者選抜の研究: 「アドミッション・オフィサー」活用の視点から: 科研奨励研究

以上で私の話を終わりますが、ちょっと時間が過ぎておりますので、質疑応答は今はなしにして、山田先生のお話に移りたいと思います。時間がありましたら、後でまたお受けいたしますので、よろしくお願いします。ありがとうございました。